

SEEDS



No.223 夏号
2014 /

自然特集
カツラ

活動レポート
知床のヒグマ対策

>>知床・人・インタビュー 第20回
内田暁友さん

>>スタッフの本棚 第13回
ごちそう山

>>知床財団 購買部
「知床かばん」新色登場です

>>知床財団 この一品 第2回
伝えるツール「ウェアラブルカメラ」

知床のヒグマ対策

文・山本幸 普及・情報係主任

知 床に暮らす人たちにとってヒグマは共に生きる生き物。かつてアイヌの人たちも「キムンカムイ（山の神）」と呼んで崇めていました。

昔から知床に暮らしていったヒグマとヒトですが、同じ場所に暮らす両者の間には、時に軋轢^{あつれき}が生じる場合もあります。知床で営まれている農業や漁業の場で被害があつたり、玄関先に出没したりするなど、時にやつかい者扱いされてしまうこともあります。

とはいってもヒグマの生活を邪魔しないように、そしてヒトもまた知床で暮らしていく様子に、私たち知床財団はいろんな方法でヒグマと関わり続けています。

例えば、一緒に暮らす相手、つまりヒグマのことをまずはよく知ることが大事だと、私たちは思っています。そのため、GPS首輪をつけてヒグマの行動範囲を調べたり、糞をひろってきて何を食べているか調べたりしています。ヒグマとヒトとの間に物理的な壁を作るため、街の縁に電気柵を張り、そのメンテナンスも定期的に行なっています。さ



知床財団を率いる事務局長の増田

クマ対策の統括責任者である事務局次長の寺山

クマ対策の現場を仕切る保護管理研究係主任の石名坂と葛西

現場歴6年目の能勢と白柳

現場とは離れた一般的見解を持つ田中とこの座談会の司会者である岡本

葛西・ヒグマとヒトの間になんらかのライン、つまり境界線がある状況が望ましいと思います。その境界線は季節や時間によつても変わることなく、同じ場所を共有するのには無理だと思います。

岡本：知床でヒグマとヒトがずっと暮らしていくために、ヒグマにとってもヒトにとってもよい状態(WINE-WINEの状態)とはどういう状態だと思いますか？

能勢：理想は「ヒグマもヒトも知床でずっと一緒に暮らしていく」という考え方ですね。ただ、どうしてもヒグマとヒトとの間に生じる軋轢は課題になりますよね。

石名坂・ヒグマはどんなにおとなしく見えても強大な力を持ついる動物なので、ヒグマとヒトが全く同時に、同じ場所を共有するのには無理だと思います。

葛西・最も重要なのは「土地利用」という要素だと思います。住宅地、農地、森林などそれぞれの場所のヒト側の利用形態によって、ヒグマとの棲み分け方が変わるのでないでしょうか。

岸で例えれば、夏以外はヒトの出入りが少ないのでヒグマが浜を歩いてあまり大騒ぎにならないでしょう。でも昆布漁の時期は子供もいるから、おのずとヒグマに対してナイーブになって、ヒグマに対する境界線を山の方へ押しやりますたくなるんだと思います。

そこで今回はヒグマ対策に関わる知床財団スタッフに、知床のヒグマ事情について抱えている思いや日々の悩み、課題を座談会形式で語つてもらいました。

一方で、ヒグマに対する住民感情は様々なのが現実です。例えば「ヒグマは大事。ずっと山にいてほしい」という意見もあれば、街の近くに出てきたヒグマに対しては「子供たちに何かあつたら困る一危ない駆除だ！」という意見もあります。ヒグマとヒトがお互いに迷惑を被らず、共にここ知床で暮らしていくには、いったいどうしたらいいのでしょうか。

また、ヒグマがヒトの行動圏に出てしまった時の対処法を伝える普及活動もしています。

マ学習^{マラソン}を実施して、調べて分かつたヒグマの生態や、万が一出会つてあります。花火やゴムでできた威嚇弾を使ってヒグマを山へ追い返したりすることも私たちの仕事のひとつです。

知床のヒグマ事情

羅臼の住宅地を歩くヒグマ



羅臼の街中を闊歩するヒグマ。羅臼の住宅は、目の前は海、裏はすぐ山という立地にある。そのため、ヒグマが海岸線にある食べ物を求めて山から一歩踏み出せば、たちまち羅臼町民の生活圏に入ってしまうのだ。

ヒグマに異常接近するカメラマン



ヒトをこわがらない“人慣れヒグマ”と異常接近するカメラマン。その距離は5メートルもなかつた。相手は野生動物、いつ気が変わってヒト側に走ってきててもおかしくない。もし、ヒグマとヒトの間で事故が起きていたら、責められるべきはヒグマなのだろうか？

石名坂・もうひとつは主産業ですかね。観光が主産業ならヒグマは観光資源として扱われ、ヒグマに対するヒトの許容度は上がると



岡本：境界線がある状態が望ましいけれど、いろいろな要素によってその境界線もまた変わることがあります。では実際、どのような方法で境界線をひいたらいいのでしょうか？

白柳：ヒグマとヒトの間には物理的、心理的な境界線が必要だと思います。かつ、お互いの越境はなしことがベストですよ。例えば、物理的な境界線として、非常に大きい壁を作るとか。

能勢・お金があれば専用のヘリコプターを購入して、そのヘリコプターでヒト側のエリアに入つてきたヒグマを山へ運ぶとかできるかもしれないですね。色んな意味でかなり現実的ではないですが。そもそも、ヒグマにとってはいきなり捕まえられて遠くに運ばれたら、大変なストレスですよね。

白柳・心理的な境界線を作ることに関して言えば、ヒグマがヒトを怖がるようにはヒト側からのプレッシャーとして狩猟も必要な要素だと思います。例えは狩猟でヒトに追いかけ回されたヒグマが、その経験から「ヒトは「ワイ」と学習して山にかえればヒグマ社会の中でヒトへの恐怖心がひろがるかもしないですね。

増田：我々はそれ、つまりヒグマがヒトへの恐怖心を山に持ちかえってくれることを信じて、まずは実弾で命を奪うのではなくて、花火やゴムでできた弾を使ってヒグマを山に追い返しているんですね。最近はそれでも懲りず前に出てくるヒグマが増えているように感じます。

石名坂：私たちがいま実施している追い払いに加えて、もう少しヒグマに対する圧力が必要かもしないですね。狩猟で一定のプレッシャーをかけることも必要かも知れません。ある海外論文に「狩猟圧が低下してくると人に対し攻撃的なヒグマが一定割合出現する」と書いてあったのを読んだことが

葛西：知床財団が工事関係者などに実施しているヒグマ対処法の講習なども、自分の身は自分で守るということを伝えられるように意識しています。

石名坂：ヒグマがどんな生き物かおとなしい生き物である半面、ムリな接近をしたらこうなるということが分かる実際の動画を使って、町民や観光客の人たちに現実感を伝えることも必要ですよね。能勢さんが撮りためている対応現場での動画が役立ちますよ、きっと！

田中：例えば、協定を結んでいる旭山動物園と連携して知床でのヒグマとヒトの現状や課題について普及するなど、発信できる場をもつとひろげていきたいです。たくさんの人たちに知床での事例を伝えていくことも、私たちができることのひとつだと思います。

石名坂・知床に限らず、野生動物とヒトの生活の折り合いのつけ方に苦労している市町村は全国各地にありますからね。いろんな場所で事例を紹介していくのはいい展開だと思います。知床財団のホー

あります。



人家裏に出てきたヒグマを追い払うスタッフ

行動してほしいと思う場面がよくあります。

葛西：言葉が通じないヒグマではなく、ヒト側をコントロールできればベストだけど、そういうかないことが多々あるのが現実です。だから、ヒグマにもヒトに対する恐怖心を持つてもらえば、と思っています。せめてヒトが100メートルくらい近付いたら逃げるとか。

ヒグマとヒトの間にほどよい緊張関係を持したいと思うのです。

寺山：ヒグマもヒトもお互いに警戒心を持つて、その結果できた目にもヒトもお互いの居場所を確保することが必要ですね。

田中：同じ知床という土地を分け合って暮らしている者同士、ヒグマとヒトもお互いの居場所を確保するための近道だとも思います。

石名坂：最近知床で問題になつては危険を伴う仕事だと、いつも思っています。だからまずは、知床財団の職員がケガや事故なく対処することも大事ですよね。そこで事故でも起こつたら、それこそヒグマに申し訳ないです。ヒグマが原因でヒトが怪我をすれば、世の中にはヒグマが悪者になりがちですからね。

能勢：ヒグマの出没現場での対応は、言葉が通じるヒト側への働きかけをもつと行なつたほうが、ヒグマとヒトが知床でうまく棲み分けられるための近道だとも思います。

白柳：ヒグマに対する圧力の一方で、言葉が通じるヒト側への働きかけをもつと行なつたほうが、ヒグマとヒトが知床でうまく棲み分けられるための近道だとも思います。

岡本：具体的に私たちにはどんなことができるでしょうか？

能勢：危険を予測して回避できる術を、町民自身に身につけてもらうような活動が必要だと思います。僕は、街中のイタドリの藪がこわいです。ヒグマは藪に身を隠しながら民家のすぐ裏までやつて



ウトロの市街地裏のイタドリを刈るスタッフ

来ます。自分の家の裏のイタドリはいつも刈つて見通しをよくしておるとか、そういう発想を町民の人たちに広げられたらいいですね。ヒグマはすぐ近くで暮らしている。だからこそ、ヒト側のヒグマに対する緊張感がもつと必要だと思います。

増田：見通しをよくするための草刈りは誰にでもできるけど、でも、なかなかその重要性は伝えられていないですね。草刈りひとつから「自分の身は自分で守る」という意識が知床に暮らす人たちにひろがつていけば、ヒグマとヒトの境界線をきちんと作れるかもしれませんね。

文・増田泰 事務局長

— 知床のヒグマとヒト —

文・増田泰 事務局長

ムページで掲載するのもいいのですが？

能勢：ヒグマの出没現場での対応は危険を伴う仕事だと、いつも思っています。だからまずは、知床財団の職員がケガや事故なく対処することも大事ですよね。そこで事故でも起こつたら、それこそヒグマに申し訳ないです。ヒグマが原因でヒトが怪我をすれば、世の中にはヒグマが悪者になりがちですからね。

石名坂：やはりヒグマには、知床の自然の番人としてずっといてほしいですね。

能勢：知床財団の役目としては、現場でヒグマと向き合うと同時に、なによりも科学的知見をもって、ヒグマの分散の過程や人慣れの過程を把握していくこと、それらのデータを蓄積し公開していくことが大事ですよね。

石名坂・知床に限らず、野生動物とヒトの生活の折り合いのつけ方に苦労している市町村は全国各地にありますからね。いろんな場所で事例を紹介していくのはいい展開だと思います。知床財団のホー

としても、お互いの存在を感じ合

いくか？境界を作ることで互いに排他的に棲み分けることでトラブルを解消する。それは最もわかりやすいプランです。人にとってヒグマに絶対に入ってきてほしくない場所、例えば市街地などではそのような棲み分けをすることになると、思っています。ただし棲み分ける